まちの話題

子どもたちが田植えを体験

6月下旬、新入小学校の5年生が、田植え体験学習会を行いました。農業に関する関心を深め、食の大切さを実感し、日々の食生活に必要な知識や判断力を養うことを目的として、新入グァーグァー市場が主催したもので、毎年同校の児童が体験しているものです。

児童らは事前に総合学習でタブレットを用いて米の栽培について調べ、23日の田植えに臨みました。冷たい土の感触を楽しみ、倒れないように稲を植える難しさを体験した児童らは「田んぼの中は気持ちよかったし、とても楽しかった」と話しました。

翌週30日にはアイガモを放鳥。身を寄せあうヒナの様子に、「かわいい」と声が上がり、児童らの手で小屋から水の中へ放たれました。参加した児童たちは「稲を守って頑張ってほしい」と笑顔でアイガモの様子を見つめていました。

同校では、昨年放鳥したアイガモのつがい２羽をもらい、現在3羽を小学校で飼育中。飼育委員が世話をし、卵を孵卵（ふらん）器に入れて有精卵の様子を観察するなど、命の学習にも繋がっています。

地元企業との強力タッグで河川の樋門を遠隔制御

7月5日、直方市とアドバンテックテクノロジーズ（株）との連携協定締結式を市庁舎で行いました。両者は令和2年度から遠隔監視制御型樋門管理システムの研究開発に取り組んでいましたが、さらなる技術改良や実証の拡大を目的に協定を結んだもの。今後は、大雨などの荒天時でも、正常に樋門を遠隔制御できるか等を検証していきます。

同社社長の石田（いしだ） 隆裕（たかひろ）さんは「産業向け電子機器の開発・生産で培った最先端のIoTやAIの技術を駆使して取り組みたい」と抱負を語りました。また、市長は「樋門を管理する担い手不足が課題となっている。テクノロジーを活用して、地域の課題を解決できれば」と期待を込めました。

筑豊高校　陸上部 ビジネス部が全国大会出場

7月2日、筑豊高校の陸上部とビジネス部が全国大会出場の報告のため、市長、教育長を表敬訪問しました。陸上部からは3名が7月28日から行われる全国高校総体へ出場。男子ハンマー投げに菊地（きくち） 龍馬（りょうま）さん（3年生）と柴田（しばた） 竜希（りゅうき）さん（3年生）、女子円盤投げに松本（まつもと） 夢叶（ゆめか）さん（2年生）が出場します。

また、ビジネス部は7月26日の第69回九州地区高等学校ワープロ競技大会をはじめ、第67回全国高等学校ワープロ競技大会、第34回全国パソコン技能競技大会に部長の古川（ふるかわ） 郁也（ふみや）さん（3年生）と部員5人が団体や個人で出場します。いずれも文書作成における速さと正確さを競います。

市長は「コロナ禍において部活動のやりにくさもあるが、日々練習すると成果は必ず出る。直方の代表としても頑張ってもらいたい」とエールを送りました。

子どもを守る支援の輪を次世代にも

直方市要保護児童対策地域協議会代表者会議

7月6日、要保護児童対策地域協議会代表者会議が中央公民館で開催されました。医療機関、教育機関、保健機関、療育機関、民生委員・児童委員、児童相談所、警察、乳児院、福祉機関等の代表者が集まり、虐待をはじめとした要保護児童（保護者のいない児童、保護者に監護させることが不適当であると認められる児童）に対する支援に関する協議を行いました。

この会議にあたり、会場の横断幕の作成を直方高校2年生書道部　中願寺（ちゅうがんじ） 綾（あや）さんにお願いし、力強い作品に仕上げていただきました。

近年、児童虐待・育児放棄・ヤングケアラー等子どもの養育に関する問題が注目を集め、その届け出件数は毎年増加しています。直方市でも、平成18年度より要保護児童対策地域協議会が設置され取り組みを始めました。今回横断幕作成に協力いただいたように、これからも次世代の方にも関わっていただき、この問題に取り組んでいきます。

農業の6次産業化　さらに地域活性へ期待

下新入で胡蝶蘭や観葉植物の生産・販売を行う「たかしまえん」。近年では自身で生産する有機栽培のバナナを活用した6次産業化など、地域活性化に繋がる取り組みが注目されています。

たかしまえんでは40年ほど前から胡蝶蘭の生産・販売を主として行っていましたが、リーマンショック以降、需要が冷え込んだことを機に減産、観葉植物の生産・販売を始めました。現在では、取り扱う植物は1,000種類を超え、観葉植物を使用したガーデニングを手掛けるまでになり、市外からも多くの人が訪れるなど、新たな観光スポットとして期待されます。

そのような中、3年前からはバナナの有機栽培にチャレンジ。店内に併設するカフェでは、スムージーや地元産の米粉を使用したシフォンケーキとして提供されており、SNSの普及で若い世代からの人気を集めています。また、今年度は県の補助事業を活用して業務用の機器を導入し、スムージーやシフォンケーキの増産を計画しています。

さらに、同園のスペースで、雑貨や飲食など他分野の事業者を集めたイベントを行うなど、人と関わる入り口を積極的に増やすたかしまえん。代表の髙島（たかしま） 三櫻（さんおう）さんは「入り口はそれぞれでも、その先で植物に触れてもらえたら嬉しい」と話しました。

市のホームページでは、この他の話題も公開しています。